

学校名：横浜市立本牧南小学校

担当：2学年担任

氏名：上田 貴清

1. 今回の研修における目的やねらい

学生時代、「開発途上国」と称される国々を訪問し、自分には何ができるのか、「支援」とは何かを模索し、答えが見付けられずにいた。その中で、自分なりにたどり着いた答えが「教育」の重要性－教育の価値－であった。今回の研修では、教育者として再び途上国の現場に赴いた自分が、そこで出会う人々との交流や経験し、見聞したことを通し、何を思い、何を悩み、それを子どもたちにどのように伝え、共に考えていけるかを見つけることを目的に、この研修に臨んだ。

その上で、今回の研修におけるねらいは三点ある。

一点目は、カンボジアを通して開発途上国の現状を捉えることで、途上国と日本の関わりを考え、当該国はもちろん、自国日本への理解を図る。

二点目は、外国と繋がり深い横浜の子どもたちに、自分が実際に現場に赴き、経験し、見聞したことでより確かな知識として、同じ年頃の世界の子どもたちの現状や思いを伝え、共に考える。

三点目は、日本にいる外国に繋がる子どもたちが、自国のアイデンティティを大切にしながら横浜の社会で生まれ育つために、教育者として自分にできることを追究していく。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

一連の研修では、JICA スタッフの入念な計画・準備のもと、現地通訳の方との臨機応変な対応で、各訪問先で十分な情報や教材を得ることができた。カンボジアのことを深く知るにつれ、この国の魅力に引き込まれていき、地図や書物上での知識やイメージではない、「今のカンボジア」に出会うことができた。それゆえに、今もまだその傷跡を残すこの国の歴史を知った時には、人ごとではない思いに駆られ、この国の人々や未来について考え、自分には何ができるかを問うては、カンボジアの人々の素朴な優しさやはにかんだ笑顔に胸がぎゅっと締め付けられることもあった。カンボジアについて考えることは日本について再認識することにも繋がった。他国を知ろうと試みることは、結果として自国への理解に繋がり、自国への理解なくして他国への理解はできないと分かった。

私は自分に何ができるのかを問い、その答えを見つけることに必死になっていた。だが、大切なことは、必ずしも答えにたどり着くことではなく、そこで出会う人々や同じ参加者と共に考え、悩み、それを共有することだと分かった。今後は授業を実践する中で、一步一步子どもたちと一緒に考えていくことで答えに近づいていきたい。なぜなら、この研修を通した本当の成果は、今年度おこなう授業のみならず、今後自分が出会う子どもたちや周囲の先生へと伝えていき、広げていくことで、長い時間をかけて、少しずつでもカタチとなって表れてくるのだと思うからである。

3. カンボジア国から学んだこと

○無意識に描いている先入観とイメージ

「貧困」とは何か。自分たちは、「途上国」のために何ができるのか。

『子どもたちに伝えたい！』その強い思いが、かえってカンボジアという国を、自分の中の「貧困」「途上国」というイメージにあてはめてとらえさせていたように思う。

物売り子どもたち、路上で寝る人々、ゴミが散乱した場所で遊ぶ子どもたち、足がない人…自分の求めているイメージにあてはまる、いわゆる「貧困」を私は無意識に探していた。ここぞとばかりにシャッターチャンスを見つけては、写真を撮っていた。

そこに、カンボジアの人々の思いはどこまで考えることができているのだろうか。当然のごとく、カメラを向けられた人々は、警戒心、抵抗感、諦めとも見える表情。私は、大切なことを忘れていた。それは、日頃教育現場で子どもたちに伝えてきた挨拶や相手の気持ちを尊重することの大切さであった。カンボジアについてまず知るためには、自分から心を開き、相手の思いに寄り添うことであった。少しずつカンボジアの人々との距離が縮まる、そこで初めてカンボジアへの理解の第一歩が始まる。そのことを仲間と共有でき、早くに気づくことができ、本当によかったと思う。私はもう少しで、「私のイメージするカンボジア」を子どもたちに伝えてしまうところだった。

事実、カンボジアの首都、プノンペンには現在目覚ましい発展を遂げ、大型ショッピングモールや高層ビル、人々の憩いの場としての公園などがいたる所に見られる。都市と農村の格差は大きく、加えて内戦の歴史や不発弾・地雷処理、貧困問題、教育問題とカンボジアに残る問題は未だ山積みではあるが、カンボジアには子どもたちという希望に満ちあふれた未来もある。

だが、実際のところ、今回の訪問を経ても、カンボジアをどこまで理解できたかは分からない。貧しさや豊かさの指標でははかれない幸せの基準があるのと同じように、私たちの指標では本当の意味でカンボジアの人々の思いにどこまで踏み込んで考えられたのだろうか。それでも、現地を訪問してきた私たちが、テレビや新聞などのニュースでは伝ええないような、カンボジアの人々との出会いから感じとった「今のカンボジア」を伝えていきたい、そう思った。

○教育がもつ価値

カンボジアは過去の内戦により、国の中枢を担う人々が根こそぎ失われ、現在、国を立て直す上で知識層の存在が絶対的に不足している現状にある。教師を育てるための教師が不足し、人材育成が機能できずにいる中で、教師の処遇も悪く、低賃金のために副業が余儀なくされ、教材研究に時間をかけることもできない。学校では国・算を中心に学校教育が行われるが、その学校体制や子どもたちの就学率も十分ではなく、また、人としての核を育てる情操教育やより生活に即した教育—生活のルール—が欠如していることもあげられる。

教育環境の整備が不十分の中、落第や家庭環境が原因で進学を諦める子どもたちは多く、社会では政治・軍の腐敗が蔓延り、カンボジアのゆるやかな時間の過ごし方には、一方でこの国を変えていこうとする意欲がない大人たちの姿とも懸念される。次世代を担う子どもたちへの教育が、カンボジアの社会を変えるために不可欠であり、そのための教育基盤作りはもちろん、教師が担う責任は大きいと思う。

「人は国の財産である」、IKTTの森本さんが、「人のよさを伸ばす」「心を育てる」ことの大切さを教えてくれた。まさにそのことを、元青年海外協力隊の田中千草さんが関わっているワット・ポー小学校を訪問した際に、カンボジアの子どもたちから感じとることができた。それは、私たちを歓迎するための音楽合奏や歌であった。体の奥底から沸き上がる感動と涙に私自身が一番驚いた。歌に込められた思い、歌を楽しむ子どもたちの様子が、全身から溢れんばかりの笑顔と自信に表れていた。

子どもたち一人ひとりのよさや可能性を見だし、その力を存分に発揮できる環境づくり、私は教師としてそのささやかなお手伝いができたらと願う。子どもたちは希望や未来に繋がっている。子どもたちが強い意志をもって、自分の力で自分の道を切り開いていける、そのほんの小さな手助けができる教師に、自分になりたいと思う。そして、それが教育の価値なのではないか。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

現地では、同じ年頃のカンボジアの子どもたちを見ては、幾度とクラスの子どもたちを思い出した。今はあれもこれも伝えたい、一緒に考えていきたいと頭でっかちに思いが膨れあがっているの、子どもたちの発達段階をよく考慮して、伝えるべく情報や教材を十分に吟味・選別していきたい。その上で、以下の三つの方向性で活用していきたいと思う。

- ① カンボジアと日本の比較を通して、世界にはいろいろな国があることを知り、自分の国に目を

向けるきっかけにする。その中でも特に、日本の子どもたちがより身近に感じられるようカンボジアの子どもたちの生活を中心に紹介をすすめる。比較を通して他国を知ることは、当たり前になりがちな日々の生活を振り返ることであり、その中で他者や多様性を認め合えるクラスづくりに繋げていく。

② カンボジアを通して開発途上国について学び、カンボジアで働く日本人について知る中で、今日本にいる自分たちにできることは何かを考える。

③ 外国籍の子どもたちの思いに近づくために、カンボジアの公用語であるクメール語の教科書や絵本を紹介し、親しみのない言語で勉強することについて考える。そして、言語に加え、さらには人種や文化も異なる国で生活することについても考えを広げていく。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

カンボジア訪問前に、「開発途上国」について理解を深める機会があり、開発教育の手法を学んだり、参加者間で思いを共有したりして、各方面での共通理解を図ることができた。その基礎知識や共通の思いをもって現地に赴いたことで、カンボジアで出会う様々な出来事にもしっかりと向き合うことができた。また、今後ずっと繋がっていたいと思えるよき仲間に出会えたことも財産になったと思う。異校種の参加者の方々やJICA同行者、通訳兼ガイドさんと話をする機会は、同じ事柄でも様々な角度で捉え、考えている面白さがあり、一人で悶々と考えるよりもずっと学びが深まった。日頃なかなか話せない自分の思いや疑問も、何でも話し合える雰囲気があり、このような教員の仲間に出会えたことはかけがえのないことであり、今後も末永く関係を続けていけたらと願う。そして、JICAによる全面的なバックアップのおかげで、普通の観光では決して訪問できない場所に行かせていただいたり、素晴らしい方々とお話ができたりと、自分一人では決して実現できない貴重な体験が詰まったとても中身の濃い研修であったと思う。この研修に参加できたことを、心から感謝している。

この研修をよりよくするために提案するとするならば、早い時期にパフォーマンスについて内容を決め、練習できたらよかった。しかし、現地では突然の変更なども起こりうるので、柔軟に対応できるよう構えておくことも必要である。今回は周りの協力があつて、急な変更にもすぐに対応でき、スムーズに進められたので、バリエーションを多めにつくっておき、臨機応変に取捨選択できるとよいと考える。

6. その他研修全般を通じての感想・意見など

今回の研修を総括すると、「素晴らしい出会い」の一言に尽きると思う。

それは、カンボジアという国との出会い、カンボジアの人々、カンボジアで活躍する日本人の方々はもちろん、JICA職員の方々、通訳兼ガイドさん、そして同じ参加者の教員の方々との出会いがあげられる。年齢も職種もこれまで歩んできた人生経験も全く異なる人々との出会い、しかし同じ思いをもって集まった人々との出会い。全ての人がカンボジアのことを一生懸命に考え、今自分にできることをしようという強い志があり、私はその姿勢にただただ感銘を覚えるばかりだった。互いの思いを尊重し合い、同じ目線に立って学び合おうとする姿勢や、向上心やバイタリティー溢れる心意気をもつ仲間の姿は、自分が目指す教師像の指針となった。

教員になって3年が経ち、少しずつ自分の役職が増える中で、日々の仕事に追われて自分の教育への思いはどこか遠くに置き去りになっていたかもしれない。しかし、今回の研修で、教育は国の未来を担う人材を育成するとても尊い仕事であることを再認識した。何より私は子どもが大好きで、子どもたちの笑顔や希望がいっぱい溢れる社会を作っていく自分の仕事に誇りをもてた。

教師生活はこれからも続いていくが、初心忘れるべからず、この研修を再スタートとし、自分の心と向き合い、私がこれから出会う子どもたちや人々に伝え、繋げていきたいと思う。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイス等

○研修では、「何かを学ばないといけない」「授業で使える素材を見つけられないといけない」と意気込みすぎると、途中で苦しくなってしまうかもしれない。一つひとつがとても素晴らしい研修なので、まずは楽しむこと、無理しないこと、そして自分が感じた思いを仲間と共有することが大切だと思う。

○現地の言葉を少しずつでも練習できるとよいと思う。やはり一生懸命相手国の言葉を話そうとする様子からは誠意が伝わる。もちろん言葉の壁を乗り越えた心の交流はできると思うが、子どもたちと何か話したいと思った時に、自分の思いを伝えられない、相手の思いを汲みとれない歯がゆさがあったからである。訪問前に事前に覚えるのはなかなか難しいので、現地についたら早いうちから積極的に使えるとよいと思う。

8. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
7月26日(火)	日本からカンボジアまでの移動中および現地到着	カンボジア到着後いきなりのスクール。ビニールカップを纏い、果敢にバイクに乗るカンボジアの人々の様子が印象的だった。また、夜に食べたカンボジア料理がとても美味しかった。
7月27日(水)	JICA カンボジア事務所表敬	在カンボジア JICA スタッフが、カンボジアの国に即した支援の仕方を、日々模索しながら実施していることが分かった。
7月27日(水)	市内見学(現地マーケット視察)	ラッキーマーケットや文房具店では、商品がとても充実していたので、カンボジアに抱いていたイメージが少し変わった。外国人向けだと思ったら、現地の人も利用すると聞き、驚いた。やはり都市部だからなのか。
7月27日(水)	JICA 無償資金援助で建設された施設	橋や各施設の建設がカンボジアの人々の生活改善に役立つことが嬉しい。中国からの支援も増えていることに、ASEAN における中国の存在感の台頭を感じる。
7月27日(水)	本日の振り返り	カンボジアという国に、自分が求めている「貧困」イメージを求めている。多角度な視点でカンボジアという国を理解していきたい。
7月28日(木)	カンボジア日本人材開発センター	日本に関心をもつカンボジアの学生、勉強や将来設計にとっても意欲的だった。カンボジアに興味をもち、すすんで学ぼうとする日本人の学生は果たしてどれくらいいるのだろうか。
7月28日(木)	本日の振り返り	マーケットでは、子どもたちが店番をしていた。学校と物売りの両立、日本の子どもたちは何を思うだろう。また、1ドルを値切る行為にふと我に返り、観光はお金を落とすものなのかと考えた。
7月29日(金)	国際保険協力市民の会(SHARE)	「自立」というキーワードが心に残った。外部者がいるからできるのではなく、当事者だけでできるような体制作りが必要だと学んだ。
7月30日(土)	アンコールワット	権力者と民、それぞれの思いが交錯した悠久の歴史が現存する地に畏敬の念を感じた。

7月30日(土)	クメール伝統織物研究所 (IKTT)	伝統は守るものではなく、作るもの。カンボジアの人々との共存の中で、より良いものを目指す先には、常に新しい伝統が作られていくのだと感じた。
7月30日(土)	本日の振り返り	たくさんの苦労と挑戦の連続の中で、信念が生まれ、たどりついた今がある。
7月31日(日)	クメール伝統織物研究所 (IKTT)	人懐っこい子どもたち、自然の中でたくさんの遊びを考え出す知恵の持ち主たち。
7月31日(日)	タップ・ローム	自然の力の驚異、人は決して自然には勝てない。自然との共存方法を模索していかないといけない。
8月1日(月)	カンボジア地雷対策センター博物館	アキラ地雷博物館と CMAC、どちらも目指す先は地雷除去。カンボジアに地雷ではなく花を…
8月1日(月)	海外ボランティア視察 (伊藤 SV. 徳富 JV)	「カンボジアの子どもたちに学校に行ってほしい」そのために懸命に働く日本人の姿に、同じ教育者としてただただ尊敬する思いでいっぱいだった。
8月1日(月)	母親教室(就学前教育)	母親同士が知恵を出し合い、協力しあって子どもたちを育てていくシステムは、日本の社会にも必要だと思った。
8月1日(月)	夜間の識字教室	夜間の時間を利用して学習しようとする子どもたちの意欲と、集中できないでいる子どもたちの様子が日本の子どもたちと重なり、子どもは同じだと思った。
8月2日(火)	ワット・ポー小学校	学ぶ意欲、全身から溢れる音楽への喜び、子どもたちの生き生きとした表情が何よりも心に残った。自分の子どもたちにもどのようにして同じ表情を育てられるのだろうか、その力をつけていきたい。
8月2日(火)	コン・ボーン氏の講演	歴史を受け継ぐ人々の世代交代が始まってきている。歴史は未来を築く指針。決して絶やしてはいけない。
8月2日(火)	本日の振り返り	現地で働く日本人のバイタリティー。カンボジアで生きる覚悟は、決して生半端な気持ちではできない。
8月3日(水)	現地マーケット視察	生活に密着したマーケット、プノンペンとは異なる庶民の生活を垣間見る空間。
8月3日(水)	トゥールスレン虐殺博物館	この国に今も残る歴史の負の遺産。忘れない過去だが、歴史を知らずして未来には向かえない。
8月3日(水)	JICA カンボジア事務所 研修報告会	この研修に参加できて本当によかった。JICA カンボジア事務所でこの10日間の学びを発表でき、次の授業実践に向けて頑張る意欲に繋がった。
8月3日(水)	本日の振り返り	子どもはどこの国も同じ。カンボジアを通して、いろいろな国と出会うきっかけづくりを大切にしていく。教育の価値、教育者としての誇りを再認識できてよかった。
8月4日(木)	カンボジアから日本までの移動および日本到着	最後まで仲間と共に有意義な研修ができた。次はそれぞれのクラスでの実践、子どもたちにより贈りものとなる授業にしていきたい。